海を越えて

発行
貞静学園中学校
2年1組
長崎（ながさき） 大嘉（たいが）

SDGs学習がきっかけ

ぼくは中学校の総合学習で「国際理解」をテーマに調べ学習をし、SDGsについてくわしく学びました。

「SDGs」とは？
持続可能な開発目標
「地球上の誰一人として取り残さない」ことを理念として、17のゴールと169のターゲットから構成されています。

Sustainable
Development
Goals

学んでいく過程で、日本と世界の国や地域が、海を越えていろいろな交流をしていることを知りました。その中でも、ぼくが注目したのは「横浜港」です。横浜港が近代・現代において日本と海外をつなぐ重要な役割を担っていることをまとめていきたいと思います。

横浜港の始まり
1853年にペリーが4隻の軍艦を率いて浦賀に来航。翌年7隻の軍艦で再び来航し、横浜に初上陸しました。上の絵は、ハイネが描いた「ペリー提督横浜上陸図」。

横浜港の歩みを調べに行こう！

「横浜開港資料館」

二度目の来航時、アメリカ側は江戸に近い場所で会談することを強く希望し、圧力をかけてきました。そこで幕府側は神奈川沖に近い横浜を提案。一八五四年に「日米和親条約」が結ばれました。その締結の地が、横浜開港資料館付近です。中庭には、時代の生き証人「たまくす」が豊かに葉を繁らせています。

「横浜みなと博物館」

開港前の吉田新田や横浜村の時代から、ペリー来航、戦中・戦後、現代までの歴史を、時代ごとに振り返ることができます。帆船日本丸の船内も見学しました。

開港により、横浜は貿易都市として発展しました。博物館や歴史的な建造物もたくさんあり、文明開化という近代日本の出発地であることを実感しました。

戦後日本に届いたララ物資
横浜港から全国各地へ

一九四五年に終戦を迎え、戦後の日本は食糧や物資の不足が続いていました。そのような中、海外に移住した日本人や日系人が祖国の苦難を知り、支援物資である「ララ物資」を贈りました。

「ララ」とは？
アジア救援公認団体（LARA）
一九四六年から約六年間に渡り、食糧、衣料、医薬品、学用品などを支援物資として日本に贈りました。
Licensed
Agencies for
Relief in Asia

海外に移住した人たちは戦時中、強制収容所に入れられたり財産を没収されたりと大変な思いをしました。しかし、日本から慰問品が贈られ、とても感謝していました。そのため、母国である日本をなんとか救済したいという思いから、アメリカのキリスト教関係者からの協力も得て、ララ物資が届けられることになったのです。

横浜港に届いて集められたたくさんの物資は、全国各地に配られました。ララ物資を受け取った人は、日本人の約六人に一人、当時の金額で約四〇〇億円（そのうち二割が日系人の支援）にもなりました。

「JICA 海外移住資料館」

横浜港は移民船出港地の一つでした。多くの方が船で渡航していきました。

ララ物資記念碑
ララ物資が到着した横浜新港埠頭には、現在「ララ物資記念碑」が建てられています。“第2次世界大戦後の多くの日本人を救った「ララ」物資”と刻まれています。

ユニセフ食糧支援 昔も今も

戦後日本の食糧不足は、ユニセフからの支援にも助けられました。

「ユニセフ」とは？
国連児童基金（UNICEF）
世界中の子どもたちの命と健康を守るために活動する国連機関。
戦後日本の食糧支援のため、一九四九年から約十五年間に渡り、給食用の脱脂粉乳、服の原料（原綿）、医薬品などを贈りました。
＊「ユニセフ給食」といわれました。

ユニセフは現在も、貧困地域の子どもたちと家族への栄養支援を続けています。さらに、保健ケア、安全な水の提供、衛生的な環境の支援など包括的に行っています。ぼくたちの募金が、海を越えて途上国の子どもたちの支援につながっています。

給食の始まりを知っていますか？
一八八九年（明治22年）、山形県鶴岡の小学校で、昼食が用意できない貧しい家庭の子どもたちに、無料で食事を出すようになったことが始まりです。
世界では、一七九六年にドイツで、貧しい子どもを食堂に集めてスープを出したことが始まりといわれています。
日本もドイツも、貧困対策がきっかけとなり、その後広まっていきました。

「ランドセルは海を越えて」

ぼくが住んでいる豊島区では、使い終わったランドセルをアフガニスタンの子どもたちにプレゼントする「ランドセルは海を越えて」キャンペーンを行っています。

「ランドセルは海を越えて」とは？

株式会社クラレが主催する事業で、「使われなくなったランドセルを紛争と混乱が続くアフガニスタンの子どもたちに届け、学ぶ喜びを知るきっかけにしてもらいたい。」という想いから、平成16年に始まりました。

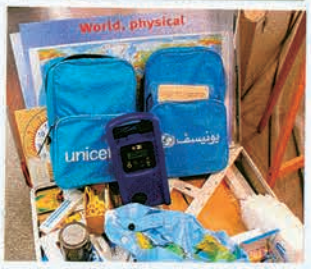
＊豊島区は、平成27年度から協力。

ぼくは小学生のときにこのお話を本で読んで、卒業したらぜひ寄付したいと思っていました。そして、卒業式の翌朝、感謝の気持ちを込めてランドセルをきれいに拭き上げ、小学校に持って行きました。

小学4年の国語の教科書（光村図書）にも載っています。7年目のお話も読んでみてください

「ユニセフハウス」

紛争が長引くアフガニスタンの他にも、世界では様々な環境で生きている子どもたちがいます。自分との共通点や違いを知ることで、自分には何ができるのか、「自分ごと」として考えさせられました。



横浜港からアフガニスタンへ ランドセルが届くまで

寄付されたランドセルが、日本から海を越えてアフガニスタンに渡り、子どもたちに届けられるまでの流れを紹介します。

①**検品**・・・ボランティアの方々も協力して、ランドセルの故障や豚皮が使われていないかなど、一つずつ検品します。ランドセルの中には、ノート・鉛筆・消しゴムなどの学用品もつめられます。

＊イスラム教徒の多いアフガニスタンでは、豚製品の使用が禁止されているため送れません。

②**船で輸送**・・・横浜港からコンテナ輸送船で出航します。シンガポールを経由して、カラチ港に向かいます。横浜港からカラチ港まで、10703㎞の距離！

③**トラックで輸送**・・・コンテナはトラックに積み替えられ、カラチからアフガニスタンのジャララバードまで、内陸輸送で158㎞の距離を運びます。ジャララバードにあるアフガン医療連合で、さらに別のトラックに積み替えて、各学校に運びます。

④**配布**・・・各学校で先生から一人ずつランドセルが手渡されます。男の子にも女の子にも平等に配られます。物資の不足している現地では、丈夫なランドセルはカバンだけでなく、机の代わりにもなります。

☆ランドセルを受け取った子どもたちはみんな笑顔!! ぼくもうれしいです!!

船がつなぐ日本と世界 コンテナ船に注目

戦後、外国から日本に届けられた支援物資も、現在、日本からアフガニスタンに届けられているランドセルも、港から船に乗って運ばれています。

船にはいろいろな種類がありますが、その中でもコンテナ船に注目しました。

「コンテナ」とは？

中に物を入れて運ぶことができる鉄やアルミニウムでできた世界共通の大きさの箱。

＊コンテナの寸法は国際的な規格で決められています。現在は、長さ20フィート（約6m）と40フィート（約12m）が主流です。

〈コンテナ船の主なメリット〉

・大きさが一定で、短時間で積み降ろしができるため効率が良い。

・ドライコンテナと冷蔵・冷凍機能のあるリーファーコンテナがあり、食料品、日用品、工業製品など色々な物を入れることができ、雨天時でも荷物に影響がない。

・輸送コストが安く済む。

「TOKYOミナトリエ」

東京港や臨海副都心について学べる「東京臨海部広報展示室」です。地上100mの位置からコンテナ埠頭を見られます。

ガントリークレーンに挑戦

コンテナを船から降ろしたり船に積み込んだりするための巨大なクレーンを、ガントリークレーンといいます。その形から「海のキリン」とも呼ばれ、大きなものは100m以上の高さがあります。

「横浜みなと博物館」で、ガントリークレーンのシミュレーターに挑戦しました。

実際には、1個積み込むのに約1分50秒です!!

重いコンテナを、繊細かつスピーディーに運ぶためには高い技術が必要です。ガントリークレーンオペレーター（通称「ガンマン」）をはじめ、船も港も多くの働く方たちによって支えられていることを実感しました。

編集後記

調べ学習の中で、船が運んでいる物には人の思いが込められていることを知りました。そのため、この新聞で、"海を越えて人と人がつながっている"ということを伝えたいと思いました。新聞作りを通して、ぼくたちのくらしは多くの人と物に支えられていること、何かあったときには助け合い、支え合うことの大切さを改めて実感しました。これからも感謝の気持ちを大事にしながら、色々な問題や課題を「自分ごと」として考えていきたいです。

参考資料

・『カラー版 交流と発展のまちガイド』 編著：南 学／岩波ジュニア新書
・横浜開港資料館 HP
・横浜みなと博物館 HP
・JICA海外移住資料館 HP
・ユニセフハウス HP
・株式会社クラレ HP
・TOKYOミナトリエ 東京臨海部広報展示室 HP